



連載「中東 混沌の中の秩序」第6回 ラマダーン月のテロ続発の思想・戦術的背景

東京大学 先端科学技術研究センター 准教授 池内 恵

.....

2016年のラマダーン月⁽¹⁾は、世界各地でテロ⁽²⁾が相次ぐ月となった。その多くに「イスラーム国」が犯行声明を出すか、事前あるいは犯行の最中に犯人がイスラーム国への共鳴を表明した。6月12日には米国フロリダ州オーランドで、「イスラーム国」への忠誠を誓ったと標榜する人物が、ナイトクラブで銃撃を行い多くの命を奪った。ラマダーン月が終盤に近づく6月末から7月初頭にかけて、中東や南アジアの各地でテロが相次いだ。

「イスラーム国」のアドナーニー (Abu Muhammad al-Adnani) 報道官は5月21日に発表された音声声明で、ラマダーン月を「征服とジハードの月」と呼び、各地のイスラーム教徒に、テロを行うよう扇動していた。直接の影響関係は実証しにくい。それぞれの事件は性質を異にしており、「イスラーム国」による直接の指令や、一定の直接的な教唆が疑われるものから、直接の関係が乏しく、各地の現地の政治・社会的文脈で犯行を起こす勢力・人物が、「イスラーム国」への忠誠や共鳴を間接的に表明し、それを「イスラーム国」側が一般の報道や、インターネット上で情報を得て、追認を表明したとみられる場合まで、多様である。

中東や南アジアでは、内戦や治安の悪化が進行する地域が多くあり、テロと呼ばれうる襲撃・殺害事件は「イスラーム国」に関連しないものも多く発生している。テロはラマダーン月に限らず発生しており、テロと必ずしもみなされない、内戦や地域紛争の過程での暴力もまた多くの人命を奪っている。その意味で、ラマダーン月の、テロと見なされる事象のみが排他的に重要な課題であるとみなす必要はない。同様に、銃犯罪が頻発する米国において、「イスラーム国」への支持や共感を標榜して行った襲撃は、多くの銃犯罪事件の中の一部ととらえることもできる。

そうであってもなお、「イスラーム国」がラマダーン中のテロの実行を世界に向けて発信

(1) イスラーム教のヒジュラ歴では1437年のラマダーン月となるが、この文章では西暦を用いて記述する。

(2) “Spate of terror attacks as Ramadan draws to a close,” *CNN*, July 4, 2016.

<http://edition.cnn.com/2016/07/03/world/isis-jihadi-attacks/>

Peter Bergen, “ISIS’ Ramadan terror campaign,” *CNN*, July 5, 2016.

<http://edition.cnn.com/2016/06/29/opinions/airport-terror-istanbul-analysis-bergen/index.html>

し、直接の影響関係が定かでないものも含めて、多くのテロ事件が実際に発生したことは、直接的な関係が存在するか否かについての個々の事件の検証や、ラマダーン月であるということとテロの増加との間の論理的あるいは宗教規範・倫理的な関係の整理を必要とする課題と言える。

本稿では、2016年のラマダーン月に頻発したテロを列挙し、それぞれの基本的な事実関係を検討した上で、断食と篤信の月とされるラマダーン月にジハードを掲げる武装闘争が扇動され、一定の呼応を勝ち取る事実を、ど

のように理解することが適切か、宗教規範の全体構造に遡って整理する。それに基づいてアドナーニー報道官が5月に発した声明を解釈しつつ、この声明が発出された背景としての「イスラーム国」の領域支配の範囲における軍事的な劣勢と、分散型で、しばしばローン・ウルフ型のテロを煽動する、2000年代半ば以降のグローバル・ジハード勢力が採用してきた戦術に、「イスラーム国」が回帰した一つの転換点として、この声明を位置づける。そこから、2016年のラマダーン月の一連のテロの意味もおおよそが明らかになるだろう。

1. 相次いだテロ

断食月として広く知られるラマダーン月は、同時にテロの扇動も活発となり、実際にテロが集中的に生じる場面があることは、近年に経験的に知られるようになってきている。特にラマダーン中の金曜日にはテロが行われることが警戒される。2015年のラマダーン月(6月18日から7月16日)、6月25日には「イスラーム国」がシリアのクルド人が主体の町であるコバネで連続して銃撃や自爆テロによって230人以上の死者を出した。翌26日の金曜日にはフランス、クウェート、チュニジアで事件が相次いだ⁽³⁾。フランス南部リヨン近郊のサン＝カンタン＝ファラビエのガス工場の襲撃事件で犯人が工場の上司を殺害し頭部を切断した後、車で工場に突入し爆発を生じさせて負傷者を出した。犯人はアル＝カーイダや

筆者紹介

1996年、東京大学文学部イスラム学科卒。アジア経済研究所研究員、国際日本文化研究センター准教授を経て、2008年10月より現職。ウッドロー・ウィルソン国際学術センター客員研究員、ケンブリッジ大学客員フェロー、アレクサンドリア大学客員教授などを兼任した。中東地域研究、イスラーム政治思想を専門とする。主要著作に『現代アラブの社会思想—終末論とイスラーム主義』(講談社、大佛次郎論壇賞)、『アラブ政治の今を読む』(中央公論新社)、『書物の運命』(文藝春秋、毎日書評賞)、『イスラーム世界の論じ方』(中央公論新社、サントリー学芸賞)、『中東危機の震源を読む』(新潮社)、『イスラーム国の衝撃』(文藝春秋、毎日出版文化賞・特別賞)。新刊『増補新版 イスラーム世界の論じ方』(中央公論新社)が5月6日に刊行予定。

個人ブログ「中東・イスラーム学の風姿花伝」(<http://ikeuchisatoshi.com/>)でも情報発信中。

(3) “Ramadan Attacks on Three Continents,” *The Atlantic*, June 26, 2015. <http://www.theatlantic.com/international/archive/2015/06/a-massacre-on-a-beach/396929/>
“U.S. reassesses threat of ISIL after 'Bloody Friday,’” *Politico*, June 26, 2015. <http://www.politico.com/story/2015/06/us-reassesses-threat-of-isil-after-bloody-friday-119485>
“Dozens Killed in Islamic Militant Attacks in Four Countries,” *Bloomberg*, June 26, 2015. <http://www.bloomberg.com/news/articles/2015-06-26/dozens-killed-from-tunisia-to-france-on-caliphate-anniversary>

「イスラーム国」が用いる黒旗と信仰告白の文言を、殺害した死体に添えた。「イスラーム国」との何らかの繋がりが疑われている。同日にはクウェートのクウェート市でシーア派のモスクへの自爆テロが行われ、「イスラーム国」が犯行声明を出した。また、同日にチュニジアの保養地スースでは海岸のホテルを襲撃し銃の乱射によって38名を殺害する事件が発生し、「イスラーム国」が犯行声明を出した。犯人は「イスラーム国」ではなく、それと競合するイスラーム主義過激派「アンサール・シャリーア」と結びつきがあるとされている。なお、この日にはソマリアでもアッ=シャバーブがさらに6月29日にはイエメンのサヌアでシーア派モスクに自爆テロが行われ、「イスラーム国」が犯行声明を出した。同日にはエジプトのカイロでヒシャーム・バラカート検事総長の車列に対して路上に止めた自動車に仕掛けた遠隔操作の爆弾による攻撃が行われ、検事総長が死亡した。エジプト政府はムスリム同胞団の犯行としているが、ムスリム同胞団は関与を否定している。

このような前例から、2016年のラマダーン月の間にもテロの危険性が高まることが警戒された。例えば、フランスで、昨年11月のパリ連続テロでも標的の一つとなったスタッド・ド・フランスで開幕戦が行われる国際サッカー大会「ユーロ2016」が開催されたが、この大会とそこに集まる群衆が標的となることが予想され、ヨーロッパ各地での各国の応援団の集会への攻撃にも警戒が呼びかけられた。

しかし実際に今年のラマダーン月の期間に行われたテロは、事前には予測されにくいものだった。対象は多岐にわたり、攻撃を行った主体の性質や規模、計画性や組織性も様々であり、「イスラーム国」などの既存の集団との直接的な関係の度合いも異なっている。対象は一方でカフェなど公共空間の娯楽の場のソフトターゲットを狙ったものがあるが、他方でサウジアラビアのメディナの預言者モスクのように宗教的な価値の高い標的、あるいはヨルダン・シリア国境の難民キャンプ付近の治安当局の施設のように政治的な意味の大きいターゲットを狙った場合もあった。

2016年のラマダーン月は6月6日に始まり、7月5日の日没に終わったが、その間に生じたテロのうち、「イスラーム国」との何らかの関連が疑われる代表的なものを、各種報道に依拠して列挙してみよう。

6月12日 フロリダ州オーランドのナイトクラブをオマル・マティーン容疑者が襲撃し49名を殺害。襲撃の最中に自ら警察の通報番号（911番）に電話をかけ、「イスラーム国」への忠誠を表明した。

6月13日 フランスのパリ近郊マニャンビルで「イスラーム国」に忠誠を誓う人物が警察官とその妻を殺害した。「イスラーム国」を支持するアウマーク通信が犯行を礼賛した。

6月21日 ヨルダンとシリアの国境ルクバーンのシリア難民キャンプの付近でヨルダン

治安当局の施設に対して自動車爆弾による自爆テロが行われ、「イスラーム国」が犯行声明を出した。

- 6月27日 レバノン北部ベカー高原のシリア国境に近いキリスト教徒の村カーアで少なくとも2波にわたり計8回に及ぶ自爆テロが行われた。
- 6月28日 イエメンのハドラマウト県ムカッターで断食明け直前に軍・警察施設への連続自爆テロが行われ、43名以上を殺害、「イスラーム国ハドラマウト州」が犯行声明を出した。
- 6月28日 トルコ・イスタンブルのアタチュルク空港で3名の実行犯が銃撃を行った上で自爆した。トルコ政府は「イスラーム国」による犯行と発表しているが、「イスラーム国」側は犯行声明を出していない⁽⁴⁾。
- 6月28日 マレーシアのクアラルンプールのナイトクラブで、シリアの「イスラーム国」の戦闘員から指令を受けた2名の犯人が手榴弾を投擲し8名を負傷させた。マレーシアで最初の「イスラーム国」による攻撃とされ、「イスラーム国」がマレー語とアラビア語で扇動映像を発表した。
- 7月1日 バングラデシュ・ダッカでカフェ「ホーリー・アーティザン・ベーカリー」を5人の犯行グループが襲撃し、銃撃によって20名を殺害した。犯人たちは事前に「イスラーム国」の旗の前で写真を撮影しており、「イスラーム国」を支持するアウマーク通信が写真を何らかの形で入手し、公開した。
- 7月3日 イラクのバグダードで、シーア派が多いカッターダ地区で、日没後でイードル・フィトルの準備で賑わう繁華街にて、自動車爆弾による自爆テロで290名以上が死亡した。続いてバグダード各地で少なくとも3回の爆破が行われ、17名以上が死亡して、この晩のテロによる死者が300名を超えた。「イスラーム国」が犯行声明を出している。
- 7月4日 明け方にサウジアラビアのジェッダで米総領事館付近のモスク周辺で自爆テロによって警備員2名が負傷した。同日、ラマダーン月を終える日没後に、メディナでは預言者モスクの警備に当たる治安部隊の司令部に対して自爆テロが行われ、治安部隊要員4名が死亡した。東部州カティーフではシーア派のモスクに自爆テロが行われた。これらについて「イスラーム国」が犯行声明を出している。

2. ラマダーン月は「休戦」の月なのか

ラマダーン月「だからこそ」テロを扇動しやすい、あるいは指令して実行させやすいの

(4) 「イスラーム国」はこれまでのトルコでの関与が疑われるテロの多くに犯行声明を出していない。

だろうか。あるいはラマダーン月「にもかかわらず」テロを行う犯人たちはイスラーム教から逸脱した人物・集団であって、いっそう非難の対象とするべき、あるいはイスラーム諸国で非難の対象となるのだろうか。これについては様々なニュアンスを含めた検討が必要である。

ラマダーン月には日中に断食を行い、性交渉を控えることがイスラーム法で規定されている。断食は5行の一つにも数えられる個々の信者の義務とされる。

ラマダーン月は預言者ムハンマドへの最初の啓示と結びついている。預言者ムハンマドは西暦610年のラマダーン月に、最初の啓示（コーラン第96章「凝血」）を受けたと信じられている。特に、ラマダーン月の最後の10日間のうちいずれかの日（奇数日、あるいは第27日といった伝承があるがどの日であるかは定かではない）に、最初の啓示が降ったとされ、ラマダーン月の終盤は断食の累積的な効果とも相まって、信仰心の高まりは著しい。このように、ラマダーン月は預言者の最初の啓示とそれに伴う驚きや喜び、それに至る期間の預言者の瞑想や煩悶といったものをムスリムに想起させ、内面的な宗教信仰を高める時期であると言えよう。

同時にラマダーン月は祝宴の月でもある。日中に断食を行い、日没後のイフタルの食卓を囲む。また、ラマダーン月には信徒の宗教心が高まり、喜捨が増えるなど、宗教規範を遵守する機運が高まることが広く知られている。

それではラマダーン月は断食及び儀礼や規範の遵守に「のみ」励むべき月であり、そうでないジハードの奨励と実践は「逸脱」と非難しうるのだろうか。

全世界の大多数のムスリムがラマダーン月を断食月として認識し実践しているのに対して、この期間に軍事的なジハードとしてのテロを行うことを標榜し、実際に実行する者が圧倒的に少数派であることは確かである。しかしこの期間にジハードを行うことが反宗教的であると断定する明確な根拠も、見出すことは容易ではない。

例えば、ラマダーン月の断食が信仰者の義務とされるからといって、その間に戦争を行うことを忌避することは規定されていない。むしろ、断食の義務は、戦場に駆り出された兵士たちには免除されるとするのが通常の解釈である。また、イスラーム法学上に規定される喜捨の正統な配分先としても、軍事的なジハードのための支出が挙げられている。ラマダーン月に盛んになる喜捨と、軍事的なジハードの励行は、元来が矛盾しないのである。

ここで想起すべきなのは、イスラーム法的な規範の根拠となる歴史事実として教えられ続けている著名な戦闘が、ラマダーン月に多く行われていることである⁽⁵⁾。そこから、ラマ

(5) Shiraz Maher, "Why so-called Islamic State chooses to bomb during Ramadan," *BBC*, 5 July 2016.
<http://www.bbc.com/news/world-middle-east-36703874>

ダーン月を特に休戦や戦闘を控えるべき月として宗教的に正当化することは困難と言えよう。預言者ムハンマドに指導されたイスラーム教団は、622年にメッカからメディナに移住（ヒジュラ＝聖遷：イスラーム教のヒジュラ暦ではこの年を元年と設定される）し、国家と権力を獲得した後、624年にメッカの多神教勢力との最初の大規模な戦闘を行い、超自然的な助力も受けて勝利したとされる。これがバドルの戦いであり、ラマダーン月に行われている。630年にムハンマドをはじめとしたイスラーム教団の軍勢がメッカを征服したのもラマダーン月のことであった。イスラーム史上に寿がれ、近現代にも書物や映画などで繰り返し描かれ賞賛されている預言者ムハンマドの戦績のうち重要なもののいくつかは、ラマダーン月に行われていることは事実である。これを現代のジハード主義者がラマダーン月中のテロを奨励する際に言及する、一定数の支持者には、有効に働くものと見られる。

また、ジハードをラマダーン中に鼓吹することは、必ずしも「イスラーム国」のような既存の秩序に挑戦し、イスラーム諸国の政権と対立する勢力によってのみ行われてきたものではなく、近代のイスラーム諸国の政権によっても用いられてきた。最も顕著な例は、1973年10月がラマダーン月に当たっていたが、この月にエジプトがイスラエルに対して奇襲攻撃を行った「ラマダーン戦争」である（この戦争はエジプトで「10月戦争」とも呼ばれるが、日本語では「第4次中東戦争」と呼び慣わされている）。

ラマダーン月において、ムスリムの圧倒的多数が、断食や喜捨といった儀礼的な側面での宗教実践を強め、それを通じた内面の純化への希求を満たしていることは言うまでもない事実である。それと同時に、ラマダーン月においても軍事的なジハードを行うことを信仰者の義務ととらえ、個々のムスリムがその置かれた場所で実行に移すことを、宗教的に価値の高い実践であるにとらえる者が、割合としては低いながらも一定数存在することもまた事実だろう。このことを指摘することは、イスラーム教徒の「多数派が」ラマダーン月に「全員」テロを行う、などということをも主張することではまったくないことを、本来なら必要のないことであるが、念のためここで確認しておきたい。

宗教規範を励行する機運が高まることと、テロが増えることは、宗教を内面の純化や儀礼の励行としてのみとらえ、政治や軍事とは無縁とするとみなす、日本に支配的な宗教観に基づけば、矛盾ととらえられかねない。しかしイスラーム教の規範の全体構造からは、ジハードがこの期間に一定数の担い手によって実行されることを、異端・逸脱として否定する根拠は定かではなく、完全に妨げることも困難である。その意味で、矛盾した、不思議な現象として捉えることは、イスラーム教の基本的な教義に内在した観点からは、出てきにくい発想と言えよう。

「イスラームは包括的なシステムであり、キリスト教的な限定的な宗教の領域だけにはとどまらず、政治・社会や日々の生活の隅々に及ぶ」といった言明を、日本でも、イスラーム

ム専門家がしばしば行ってきた。その場合、「包括的」であるならば、当然テロも戦争も含み得ると論理的には認めるしかないはずである。「イスラーム」に含まれるものは全て善であり、それ以外のものが含まれた場合はそれは「イスラーム」ではないと論じることは、信者の信仰表明としてはありうるが、客観的な分析を目指すのであれば避けたほうが良いトートロジー（同語反復）の論理である。

3. アドナーニーの声明と「イスラーム国」の戦術転換

このような背景を考慮に入れると、5月21日に公開された「イスラーム国」のアドナーニー報道官による音声声明で、ラマダーン月を「征服とジハードの月」を形容している⁽⁶⁾ことは、それ自体が逸脱の解釈に基づく宗教的な根拠を持たないものまで断じることはできないように思われる。宗教的な逸脱として非難することは、「イスラーム国」と同列に宗教論争の土俵に踏み入った上で、むしろ規範的な典拠への参照において競争した結果、劣勢に立たされることにすらなりかねない。それよりも、テロの非人道性を批判する方がより効果的だろう。

もちろん、イスラーム教徒の中から、初期イスラーム史の「征服とジハード」の規範的な効力を大きく減殺させるほどの、宗教規範の典拠テキストの解釈の転換を唱導する改革思想が出てくるのであれば、それを否定すべきとする根拠は見当たらない。しかし「ラマダーン月のジハードの扇動とテロの増加が、イスラーム教の教義体系の一部と関連する」ことを否定する議論が、そのような関連づけを可能にする宗教規範の典拠の解釈を否定するためにではなく、もっぱら「テロとイスラーム教との関連を指摘する者に対する論難」にしかつながらないのであれば、そのような議論が宗教間の対話に資することはそれほど

(6) “Islamic State calls for attacks on the West during Ramadan in audio message,” *Reuters*, May 22, 2016.

<http://www.reuters.com/article/us-mideast-crisis-islamicstate-idUSKCN0YC0OG>

アドナーニーの2016年5月21日の音声声明は「明証によって生きるもの」と題されている。YouTubeにアップロードされて流通したものは削除されているが、各種ウェブサイトで聴取可能である。一例として下記 URL を挙げる。

<https://pietervanostaeyen.com/2016/05/>

アラビア語の文字起こしは下記 URL で閲覧可能である。

<https://pietervanostaeyen.files.wordpress.com/2016/05/adnanimay2016.pdf>

英語への翻訳は、「イスラーム国」側のハヤート・メディア・センターが流通させたものは次の URL で閲覧可能である。

<https://pietervanostaeyen.files.wordpress.com/2016/05/al-hayat-that-they-live-by-proof.pdf>

別の英訳が下記にて閲覧可能である。

<http://heavy.com/news/2016/05/new-isis-islamic-state-al-furqan-media-audio-message-that-they-live-by-proof-egyptair-flight-ms804-804-mp3-read-english-translation-text-download/>

アドナーニーの音声声明の主要部分の抜粋としては、英語字幕を付けたものをMEMRIが公開している。“#5478 - ISIS Spokesman Abu Muhammad Al-Adnani Calls on Supporters to Carry Out Terror Attacks in Europe, U.S.,” *MEMRI*, May 21, 2016.

<http://www.memritv.org/clip/en/5478.htm>

なく、むしろ相互の脅威認識や敵対心を煽ることに多くつながる。ましてや、その論難が、暴力の威嚇や、暴力の行使の扇動に直接あるいは間接につながるのであれば、いっそう問題を秘めたものとなると言わざるをえない。

アドナーニー報道官の声明は、ラマダーン月にジハードを鼓吹したこととその効果以外に、二つの点で特筆される。一つは、これに先立つ時期に進んでいた、欧米諸国と現地政権・勢力との連携によるシリアとイラクで、およびリビアにおける「イスラーム国」の領域支配・勢力範囲に、強い軍事的圧迫がかかっており、劣勢に立たされていたことである。アドナーニーの声明は、基本的に、劣勢を認めつつ、なおかつ戦い続けるという意思表示であり、「イスラーム国」およびその支持勢力を鼓舞し続け、かつ敵対する諸勢力に恐怖心を持続させようとする試みと言えよう。

第二に、この声明で、領域支配において劣勢に立たされた「イスラーム国」が、世界各地でローン・ウルフ型の分散型のテロを扇動する方向に傾いたことが重要である⁽⁷⁾。2000年代半ば以降、グローバル・ジハードの運動において、結集して組織化を行い領域支配の範囲を得ることが現実的には困難な状況下で、各地で「フランチャイズ」のように個別の組織が並立して出現し、さらにそのような組織化が不可能な場所では分散型の小組織や個人を扇動してローン・ウルフ型のテロを中心とした小規模な攻撃を積み重ねることが、基本的な組織原理となった⁽⁸⁾。元来が「イスラーム国」もその系譜において成立した集団だった。ただし、2003年のイラク戦争によるフセイン政権の崩壊が、他のアラブ諸国で2011年以後に進んだ政権の崩壊や動揺に先立っていたことから、「イラクのアル＝カーイダ」を前身とする「イスラーム国」は、中央政府の統治の及ばない空間への領域支配とカリフ制の宣言を、他のジハード集団に先立って現実的な目標としており⁽⁹⁾、2014年に実際にそれを達成したことで、飛躍的に注目を高め、世界のジハード主義運動の主導権を握った。そこから、ローン・ウルフ型のテロを奨励するよりも、実際にイラクとシリアの「イスラーム国」の支配領域に移住して戦闘に加わる、義勇兵としてのムジャーヒディーン（ジハー

(7) なお、アドナーニー報道官は2015年のラマダーン月の最中の6月23日にも、ラマダーン月に征服と殉教を行うことを唱導し、ラマダーン月を「不信仰者の災厄」の期間とするために「シーア派と背教者ムスリム」への攻撃を行え、と扇動している。しかしここではまだ「イスラーム国」は優勢に立っているという姿勢であり、イラクやシリアなど「イスラーム国」の領域支配が行われている場所での支持者の扇動が主で、世界各地の一匹狼型テロにそれほど重点を置いていない。“Islamic State urges followers to escalate attacks in Ramadan,” Reuters, June 23, 2015.

<http://www.reuters.com/article/us-mideast-crisis-ramadan-idUSKBN0P31YH20150623>

(8) 池内恵「グローバル・ジハードの変容」『年報政治学』2013年第I号、木鐸社、2013年6月、189-214頁、池内恵「一匹狼（ローン・ウルフ）型ジハードの思想・理論的背景」『警察学論集』第66巻第12号、立花書房、2013年12月、88-115頁、池内恵「指導者なきジハード」の戦略と組織『戦略研究』第14号、戦略研究学会、2014年3月20日、19-36頁池内恵『イスラーム国の衝撃』文藝春秋、2015年。

(9) 池内恵「アル＝カーイダの夢——2020年、世界カリフ国家構想」『外交』第23号、外務省、2014年1月、32-37頁

ド戦士)を多く動員した。それが近隣のアラブ諸国や西欧諸国など、義勇兵の送り出し国にとって、帰還兵が引き起こす脅威を含めて、大問題となった。

しかしアドナーニーの声明において「イスラーム国」もまた、軍事的な圧迫の強まりや、領域支配の縮減という、劣勢に立たされた状況下では、義勇兵を呼び寄せるよりも各地でローン・ウルフ型のテロを煽動して報復・威嚇を行う戦術に切り替える志向性を持つことを示している。「イスラーム国」は領域支配の確立以後も、持続的にローン・ウルフ型のテロを煽動していたものの、同時に義勇兵としての移住を奨励していた。劣勢に立たされたことを認めローン・ウルフ型テロを奨励するという組み合わせは、アドナーニーの今回の声明で特に顕著となったと言えよう⁽¹⁰⁾。2016年のラマダーン月のテロの続発は、直接・間接にこの声明を現実化し、少なくともメディア上では「イスラーム国」の脅威が健在であることを印象づけたという意味において、「イスラーム国」の当面の戦術転換が一定の実効性を持っていることを示しているだろう。ただしテロの拡散に危機感を抱いた米国や西欧諸国、あるいは中東やイスラーム諸国の反応次第では、「イスラーム国」の弱体化を推し進める決定的なきっかけとなる可能性もある。

*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。

(10) 領域支配の範囲で劣勢に立たされており、それが各地でのテロの頻発につながる事情についての論評としては、例えば次のものが参考になる。Ian Bremmer, “These 5 Facts Explain ISIS’s Ramadan of Terror,” *Time*, July 8, 2016.
<http://time.com/4397020/isis-terror-attacks-ramadan/>